



地元を大事に
これから出会う人たちも大事に
そしたら楽しい人生になる



Report

「西米良寄席」関連企画 落語家 月亭太遊の特別講話

2024.7.17 (西米良村立 西米良中学校)

朝から太陽が燦々と照りつける7月某日、落語家の月亭太遊さんが、西米良中学校で講話を行うため来宮されました。太遊さんは、9月7日に開催する「西米良寄席」の出演者のおひとり、大分県竹田市出身の落語家さんです。

車窓から雄大な山々や川を眺めながら、劇場から車で約1時間半、束の間の癒しドライブを楽しみ西米良中学校に到着！窓の外いっぱい緑が広がる音楽室に、全校生徒25名と先生たちが集まり、いよいよ講話の時間です。

大きな拍手とともに期待と緊張感が漂う中、普段見慣れない着物の太遊さんに視線があつまります。太遊さんは登壇するやいなや、生徒一人ひとりの顔を見渡すと、「楽しんでよー！だらつと家で過ごすみたいになんて笑」と生徒たちの緊張を少しづつほぐしていきまふ。君たち双子？僕の弟も双子でね」となど、少しコミュニケーションをとりながら、話題は、太遊さんの子ども時代へ。

「僕も、中学校まで同級生は7人しかいなかったんですよ」の言葉に、一気に親近感を抱く生徒たち。

芸人になる夢を追いかけて田舎から都会へ出てきた時のことや、7人の同級生の内の1人とコンビを組んで漫才師になったことなど、都会で暮らす大変さや漫才師としての経験を、笑いを交えながら語りました。

コンビ解消により、漫才師をあきらめて落語家を目指した経緯も語られ、「落語は趣味で聞いていただけだったのに、いつしか自分も落語をやってみたいという思いに変わっていった」という太遊さん。バイト帰りに夜道でばったり遭遇した月亭遊方師匠に、その場の勢いで「弟子にしてください」と迫った時のことを面白おかしく語ると、生徒も先生も大笑いで、会場は終始和やかな雰囲気になりました。

講話の後半では、「落語は堅苦しくなく、気軽に楽しむもの」と実感してもらったため、簡単な小噺や、アレンジされた日本昔話を披露する場面も。

また、扇子を箸に見立てて、うどんをすすする仕草をレクチャーする場面では、太遊さんが見本を見せると「おお」と歓声があがり、先生も含め全員でチャレンジすることに！思いのほか、麺をすすめる音を真似るのが難しく、皆さん苦戦している様子でしたが、大いに盛り上がりました。

民話の里といわれる西米良村では、小学生から民話の語り部を体験するそうで、太遊さんが「日本各地の民話をモデルにしたような落語もあるよ」と話すと、「そうなんだ」と大きくうなずく生徒の姿もありました。

太遊さん曰く、「一人で何役もこなす落語は、見る側の想像力に頼る部分も大きい」とのこと。「民話の語りで、想像しながら話を聞くことに慣れている西米良の皆さんなら、きっと落語も楽しんでもらえるはず」とも話されました。

最後のまとめでは、自身の経験から「もし、夢や目標が叶わず挫折してしまつても、新たな挑戦ができるように、普段からいろんなコトや人に興味を持つておくことが大事」と強調しました。さらに、「初めて会う人に話しかけるのは勇気がいるけれど、積極的に人と関わってほしい。自分の考えと合わないと思つてもシャットアウトせず聞く耳を持つて！」とコミュニケーションの大切さにも触れ、「地元を大事に、これから出会う人たちも大事に、そしたら楽しい人生になる」と締めくくりました。

生徒の皆さんは、西米良中学校を卒業後、高校進学に伴い村を離れることになるそうです。太遊さんのお話は、いずれ村を離れて新しい環境に飛び込んで行く彼らの状況とも重なる部分があったと思えます。

講話の最後には、生徒を代表して一人の生徒から、「将来に役立つ話が聞けてよかった。今後の学校生活でも勇気を出して人と関わっていききたい、頑張ります」とお礼の言葉がありました。

西米良中学校の皆様、ありがとうございました。

9月7日の「西米良寄席」には、月亭太遊さんのほか、上方落語家の桂ちよよば師匠、桂九ノ一さん出演されます。南京玉すだれや大喜利などもあるので、お楽しみに！

